



2025年10月25日
第056号

JR東労組 Yokohama

JR東労組横浜地本

発行人 梶田 優一

編集 情宣 担当

ホームページ

<http://www.jreu-yokohama1.jp/>



イーハトーブ

10月25日号

十月十日、内閣総理大臣石破茂は、戦後80年所感を発表し、「国民の皆さんと共に考えたい」として、歴史の時系列を並べ、政治システムがなぜ歯止めたり得なかったのかを示し、統帥権の独立の名のもとに軍部の独走を許したとしている。

では、なぜ軍部は無謀な戦争に突き進み得たのか。それは天皇が行使すべき統帥権が有名無実化したからである。大正期の日本は経済的に米英に依存し、国際条約に批准しワシントン体制に順応しようとした。これに対し、「亜細亜を日本が処理し、英米本位の平和を排す」という反体制派が存在した。中でも関東軍は「謀略により機会を作製し、軍部主動となり国家を強引す」とし、石原莞爾、板垣征四郎、朝鮮軍の林銑十郎らが独断で軍を動かす、国際社会に対する挑戦たる満州事変を引き起こした。この行為は陸軍刑法によれば死刑であるが、「将来十分注意せよ」との天皇の言葉で罪を問われることはなかった。

かくして、大日本帝国軍の軍紀は有名無実化し、軍の統制は崩壊していく。軍紀違反は追認され、それどころか蛮勇が出世の道になった。死刑になるべき林銑十郎は大命降下されるに至る。承服しかねる決定を覆そうという動きが絶えず発生し、場当たりな対処を繰り返した。そして、統制のため道徳や精神論に傾倒し、アジアの人々への差別意識と楽観論に基づき戦線を拡大したその結果として、軍民を問わず多くの死者を出すに至ったのである。

もうひとつ、石破所感には日本のアジア侵略に触れられていない。日本のアジア進出の実態は満蒙特殊権益論から始まる資源獲得のために他ならず、多くのアジアの人々から資源を収奪しながら、五族協和や大東亜共栄圏といった修辞で覆い隠したのである。これらを語る代わりに、国会議事録から消された斎藤隆夫の反軍演説が2度も登場する。封じられた言葉にこだわる石破茂もまた、言葉を封じられているのかもしれない。

今日、大日本帝国軍は存在しない。しかし、大日本帝国軍のような組織運営は未だに日本に根付く。過ちを起こさないために、人権を尊重し、民主的統制を大切にし、そして平和を希求することで、日本国憲法に掲げた崇高な理想と目的の達成を目指そう。(D.F.)

イーハトーブとは

「注文の多い料理店」や「雨ニモマケズ」などの著者として有名な宮沢賢治による造語です。

故郷の岩手県をモチーフとし、彼の心の中にある理想郷を示す言葉です。

社会に目を向け、新しいものを積極的に取り入れ、農民の生活向上のために

最後まで尽力した宮沢賢治の生き方に学びながら、私たちも外に目を向け、

私たちが安心して働き暮らせる理想郷を実現していこうという想いを込め、

イーハトーブというタイトルで情報発信を行っていきます。



戦後 80 年所感